

実親に対する介護役割を子はどう想定しているか

—きょうだい地位ときょうだい構造に着目して—

西野 勇人

(東日本国際大学健康福祉学部)

【要旨】

本稿は、自分の親の介護の担い方としてどのようなあり方を想定しているか、その老親扶養に関する想定の規定要因を、NFRJ18 のデータから明らかにする。もし親に介護が必要になった場合はどのような介護を想定しているかという意向をアウトカムとし、多項ロジスティック回帰分析を行った。回答者の情報、親の情報、きょうだい地位、きょうだいの相対的居住地を説明変数とした分析の結果、以下のことが明らかになった。まず、親の健康状態が悪化するにしたがって、自分以外の家族による介護や、施設による介護といった、自分が介護に関わらない想定の選択肢を選びやすくなることが明らかになった。次に、きょうだい地位はいくつかの点で介護意向の内容と関連しているという点と、きょうだいによるサポート資源のあり方も介護意向と関連している点が明らかになった。きょうだいの中に回答者よりも親の近くに住んでいるきょうだいがいる場合、自分が主たる介護者になるとは想定しにくくなるが、全く介護に参加しない選択肢も選びにくく、家族を中心とした介護をイメージしやすいことが明らかになった。

キーワード： 親子関係、高齢者介護、老親扶養意識、きょうだい構造

1. 研究の目的と背景

本稿では、成人子が自分の親に対する介護のあり方をどのように想定しているか、その老親扶養に関する想定の規定要因を明らかにする。

2000 年にスタートした介護保険は、普遍的な高齢者介護サービスとして日本社会へ根付いてきた。これは、身近に家族がいる高齢者でも公的な介護サービスを利用できるようになったことを意味する。介護保険施行前の日本の高齢者福祉では、公的な介護サービスの受給者は、家族の扶養を受けられない者や低所得者に限定されていた。介護保険ができるまでは、あくまで高齢者の扶養責任は家族にあるという前提で高齢者福祉制度が作られ、高齢者の扶養や介護は、まず家族が担うものとされていた。介護保険の導入は、所得や家族形態に左右されず、必要に応じて介護サービスを受けられる普遍的な介護制度の実現を目指したものであり、同時に、介護の責任を家族だけに押しつけない、「介護の社会化」を目指すものだった。

しかし現在でも、高齢者介護の提供者として、要介護者の家族の役割は大きい。介護保険制度は家族の介護負担を軽減する「介護の社会化」を目指していたが、家族による世話を全て公的サービスが肩代わりするように設計されているわけではなく(堤 2010; 濱島 2018)、

現在でも家族は介護における重要な参加者であり続けている。

その家族の負担は、どのように担われてきたのだろうか。かつての日本では、家督相続制度の下、長男が親の財産相続権と扶養義務を一手に引き受ける制度的規範が作られ、介護の場面においては、多くの場合、長男の妻に介護役割が集中していたとされる。戦後の民法改正によってイエ制度を支える制度的基盤が失われた後も、長男夫婦が夫方の親と同居し、その親の介護を嫁が引き受けるという援助形態は、戦後もしばらく残っていた(染谷 2003)。例えば 1968 年に全国社会福祉協議会が行った調査では、寝たきりの高齢者の主な介護者で一番多いのは嫁で、全体の約半数を占めていた(津止 2021)。

そうしたイエ制度に基づく規範意識は、時代の変化と共に徐々に薄れてきている。2019 年の「国民生活基礎調査」においては、要介護高齢者を実際に介護している主な介護者は、配偶者と実子で約半数を占め、嫁が主たる介護者となっているケースは 7.5%まで低下している(厚生労働省 2020)。内閣府の調査においても、家族の中の誰に介護を望むかという質問に対し嫁を挙げる割合は、1995 年から 2003 年のあいだだけでも 12.1%から 6.0%へ半減している(内閣府 2003)。高齢の親に対する介護を息子の配偶者が担うという嫁介護は、一定程度は残りつつも、実態の上でも規範意識の上でも薄れてきている。

そのように、イエ制度的な規範が後退している一方、介護役割におけるジェンダー不均衡は、息子より娘の方が介護を担いやすいという形で現在も残っている。したがって、家制度的な規範が後退していることを以て、親子間の援助関係が、情緒的なつながりに基づく選択的な関係へ変化したと素朴に捉えることには一定の問題があるだろう(春日井 2014; 中西 2007; 中西 [2009] 2016)。

家族介護を引き受けることは一定の社会的リスクと結びついていることも指摘されており、そうしたリスクをはらむ家族介護者の役割が、要介護者の家族の中でも偏って配分されている点はこれまでも問題視されてきた(春日 2001, 2010)。長男の妻が中心となる嫁介護が縮小し、子どもの側の主体的な選択の重要性が高まっているのだとすれば、その選択や想定の中身がどのように形成されているのか、その形成パターンを理解することには一定の意義があると考えられる。

本稿では、NFRJ18 の調査データを用い、自分の親に介護が必要となったとき、どのような担い方を想定しているかという、老親介護における想定のあるり方とその規定要因を明らかにする。

2. 先行研究

親世代に対する介護役割をめぐる研究は、介護の場面でのケア提供の実態を扱うものと、規範意識や期待という主観的な態度を扱うものがある。そして主観的な態度を扱う場合も、一般的な規範に着目する研究、親の側からみた将来の意向、子どもの側からみた将来の意向という 3 つのアプローチがありうる。本稿では、子どもの側からみた将来の意向というアプローチを採用する。この節では、これまでの、日本の家族介護の役割分担についての先行研

究を紹介した上で、本稿のアプローチについて説明する。

介護役割をめぐる研究においてはまず、実際に親世代の介護を担っているのが誰か、あるいは誰が親世代の介護を担いやすいか、といった介護提供の実態に関する研究が多く蓄積されている。例えば、長男の配偶者にも介護役割が残っているという分析がある一方で(小山 2001; 白波瀬 2005; 田中 2013)、親の介護役割と出生順やきょうだい地位の関係は同居を通じた間接的なものであるという結果もある(菊澤 2007)。また、就業状況が介護への関与と関連しているという点や(菊澤・植村 2019)、夫婦がそれぞれの親に対して援助する「夫婦の個人化」現象がみられること(大和 2017)、また、実際に提供される援助の種類によってもケア提供の要因が異なることなども明らかになっている(西野 2021)。

一方で、実際意思決定の背後にある意識や態度に関する研究もあり、そうした介護に関する意識や態度の研究には、いくつかのアプローチがある。まず、自分が介護を受ける場面で誰からの介護を想定しているかという期待を扱った研究がある。例えば、NFRJ98、NFRJ08を用いた大和(2016)の分析では、介護保険の導入前後で、介護を「専門家に頼る」という期待は高まったこと、介護期待は、「専門家のみ」に頼る」という場合と「専門家と家族の両方に頼る」という回答の両方が高まっており、家族がいる回答者の場合は、「専門家のみ」の介護に期待する確率は低いことが明らかとなっている。

老親介護に関する意識を扱う場合、高齢の親の介護を家族が担うべきか、といった一般的な規範意識としてアプローチする方法がある。しかし一般的な規範意識を扱う場合、質問への回答が、「自分もその通りに行動するか」ということを必ずしも表してはいない可能性がある。例えば、一般的には親の介護は家族が行うべきだが、(他のきょうだいが介護するはずなので)自分はするつもりはないという態度や期待を持つ可能性がある。こうした態度は一般的な規範を尋ねるだけでは見えてこない。

本稿が分析対象とするのは、具体的に自分は将来(もしくは現在)の親の介護においてどのように関与するつもりをしているかという、具体的な想定あるいは意向である。こうした、子どもの側からみた老親介護意向は、実際の介護の担い方にも影響することが考えられる。

こうした、子どもの側からみた老親介護意向に影響する要素としてはまず、情緒的親密さの影響が指摘される(中西 2007)。その他の点としては、長男の場合、親に対する介護などの世話的援助を提供する意向が高いという指摘もあるが(杉山 2010)、そうしたきょうだい構成の影響が見られないとする分析もある(中西 2007)。

親の介護に関する先行研究において、回答者のきょうだい情報は頻繁に注目されている。しかし、これらの変数をもつ意味には、複数の点が混在していると考えられる。きょうだい地位や出生順は、イエ制度において重要視される要素として位置づけることが多いが、同時にきょうだい地位は、きょうだい構成という情報を通して、子どもとしてのサポートネットワークの豊かさを表している側面もある。きょうだい地位は、出生順を表す一方で、きょうだい数とも一部では関連している。長男・長女ではないきょうだい地位の場合、出生順だけでなく、他にきょうだいがいることも意味するためである。親の介護に関して、長男・長女

ではないことの効果が確認された場合、それが次男・三男といった地位のもつ効果なのか、他にきょうだいが存在していることによる効果なのかが、必ずしも明瞭ではない。本稿の分析では、こうしたきょうだい地位が指し示す意味を区分するため、長男かそれ以外の息子か、といったきょうだい地位そのものに加え、きょうだいの中に、介護の局面で頼れそうなきょうだいがいるか否かという情報を分析に含める。

以上より本稿では、NFRJ18のデータを用い、子が、自分の親の介護をどのように担うと想定しているかという、子側の介護役割イメージをアウトカムとして分析する。その際、回答者や親の情報に加え、きょうだい地位と、きょうだいの中での親との相対的距離をそれぞれ投入したモデルを推定する。

3. 分析方法

3.1 データ

分析には、「第4回全国家族調査(NFRJ18)」のデータを用いる。回答者のうち、調査時点において、両親のいずれかが健在である回答者を対象に分析を行う。

NFRJ18の質問紙では、回答者の父親・母親それぞれに対して、現在の状況や回答者との関係性が尋ねられている。本稿では、父親に対する回答と、母親に対する回答をそれぞれ独立したデータセットとして扱い、それぞれのデータで個別にモデルを推定する。

3.2 アウトカムと分析モデル

本稿の分析では、回答者の父と母それぞれの介護を回答者がどのように想定しているかをアウトカムとし、多項ロジスティック回帰分析を行う。

アウトカムとして用いる変数は次の通りである。質問紙においては、回答者の父と母のそれぞれについて、「この方に日常生活の介護が必要になった場合、あなたご自身が身の回りの介護をすることになると思いますか。(現在、介護が必要な場合は、いまの状態でお答えください)」という質問がなされている。選択肢は、「1 自分が主に介護をすると思う」「2 主ではないが介護を手伝うと思う」「3 自分以外の家族で介護をすると思う」「4 施設等にまかせると思う」の4つである。

分析においては、上記の4つの値をとりうるカテゴリ変数をアウトカムとした多項ロジスティック回帰分析を行う。アウトカムの参照カテゴリを「主ではないが介護を手伝うと思う」とし、このカテゴリを基準としたオッズ比を推定する。分析結果を報告する際は、推定されたパラメータに加え、仮想ケースを基にした予測値を示す。

3.3 説明変数

モデルにおいては、回答者の年齢、回答者の就労状態、回答者の配偶者の有無、親の健康状態、回答者と親の居住場所の距離、両親がともに健在か否か、回答者のきょうだい内での

地位、回答者よりも親の近くに住んでいるきょうだいの有無を説明変数として用いる。

回答者の就労状態は、働いている場合を1とするダミー変数を用いる。回答者の配偶者の有無も、回答者に配偶者がいる場合を1とするダミー変数として扱う。回答者の性別は、きょうだい内での地位として変数化しているため、性別のダミー変数は設けない。

親の健康状態は、「この方のこの1年間の健康状態は、おおむね、いかがでしたか」という質問に対する回答を用いる。この質問の選択肢は、「おおむね良好」「生活に手助けはいらぬが良くはない」「生活の一部に手助けがいる」「常に介護がいる」の4つである。分析モデルでは、上記の選択肢をカテゴリ変数として用いる。

回答者と親の居住場所については、「同居」「30分未満のところ別居」「30分以上」の3つのカテゴリへ統合した変数を用いる。この3つのカテゴリは、後ほど述べる、他のきょうだいと親の居住場所の距離を変数化する場面でも用いる。

続いて、両親が健在か否かというダミー変数を用いる。介護が必要となったとき、家族の中で頼られるのは、子どもだけではなく、要介護者の配偶者も頼られる。介護の場面で子どもがどのように登場するかは、要介護となった高齢者に配偶者がいるか否かという点からも影響を受けるはずである。そのため、両親がともに健在か否かという点については、両親が健在である場合に1となるダミー変数を作成した¹。

性別と健在のきょうだい数の情報から、回答者を「長男」「長女」「長男以外の息子」「長女以外の娘」という4つのカテゴリに振り分けた。男性の回答者で、健在の兄が0人と回答した場合を「長男」、兄が1人以上いると回答した場合を「長男以外の息子」とし、女性の回答者のうち、健在の姉が0人と回答した場合を「長女」、姉が1人以上いると回答した場合を「長女以外の娘」とした²。

加えて、きょうだいの中の相対的な居住場所を説明変数として投入する。きょうだい構造のあり方については、きょうだい数に着目する場合や、長男か否かという点に着目する場合、また、男きょうだいがいるか否かという点に着目するもの(中西 2007)など、いくつかの観点がある。親の介護に関するイメージが形成される際、自分以外のきょうだいをどの程度頼ることができそうかということは重要であると考えられる。本稿の分析では、単純にきょうだいがいるか否かという点ではなく、介護の場面で頼ることができそうなきょうだいがいるかという点を扱う。こうした他のきょうだいに対する期待を操作化した変数として、回答者よりも親の近くに住んでいるきょうだいがいるか否かという変数を作成した。

NFJR18では、健在のきょうだいについて最大3人分、「このきょうだいの方は、あなたの親と一緒に暮らしていますか」という質問が尋ねられている。選択肢は、「このきょうだい

¹ 両親が両方健在であるというだけでは、親が現在配偶者と共に生活していることは意味しない(例えば、離婚した両親がそれぞれ別々に健在であるという場合など)。しかし親が配偶者と一緒に住んでいるかを正確に判別する方法はなかったため、両親が健在かというダミー変数で代用する。

² この方式で用いることができた情報は、現在健在のきょうだいがいるか否かという情報である。回答時点で既に死亡したきょうだいがいる場合、生まれたときのきょうだい地位を正確には表していないことになる。

と親は同居」「30分未満で行ける近さで別居」「30分以上かかる遠さで別居」の3つである。この回答内容から、回答者と親のあいだの距離と同じもしくはより近い場所に住んでいるきょうだいがいる場合に1となるダミー変数を作成した。

以上で述べてきた変数に欠損がないケースを本稿の分析対象とする。分析に用いたサンプルの記述統計は表1の通りである。

表1. 分析に用いた変数の記述統計

		父親に対する回答 (N=1,261)			母親に対する回答 (N=1,841)			
		N	割合(%)	Mean	SD	N	割合(%)	Mean
親の介護時の予測	主ではないが介護を手伝うと思う	559	44.3		769	41.7		
	自分が主に介護すると思う	261	20.7		449	24.4		
	自分以外の家族で介護をすると思う	248	19.7		321	17.4		
	施設等にまかせると思う	193	15.3		303	16.4		
回答者の年齢			43.3	9.26			46.5	10.5
回答者の就労状態	有職	1,075	85.2		1,545	83.9		
	無職	186	14.8		297	16.1		
回答者の配偶者の有無	配偶者あり	928	73.6		1,354	73.5		
	配偶者なし	333	26.4		488	26.5		
両親が健在か	はい	1,143	90.6		1,148	62.3		
	いいえ	118	9.4		694	37.7		
親の健康状態	おおむね良好	846	67.1		1,226	66.6		
	生活に手助けはいらすが 良くはない	256	20.3		317	17.2		
	生活の一部に手助けがある	100	7.9		204	11.1		
	常に介護がある	59	4.7		95	5.2		
居住場所の距離	30分未満	326	25.9		490	26.6		
	同居	340	27.0		509	27.6		
	30分以上	595	47.2		843	45.8		
きょうだい地位	長男以外の息子	177	14.0		258	14.0		
	長男	397	31.5		590	32.0		
	長女	477	37.8		683	37.1		
	長女以外の娘	210	16.7		311	16.9		
回答者より親の近くに住むきょうだいの有無	いる	910	72.2		1,269	68.9		
	いない	351	27.8		573	31.1		

4. 分析結果

4.1 モデルの推定結果

図1と図2は、上記で述べた多項ロジスティック回帰モデルの推定結果を示したものである。図1は、父親に対する回答の推定結果、図2は、母親に対する回答の推定結果である。

親に対する現在もしくは将来の介護をどのように想定しているかを尋ねた項目をアウトカムとしている。アウトカムの参照カテゴリは、「主ではないが介護を手伝う」であり、図中では、この参照カテゴリの選択肢を選ぶ確率をベースとしたオッズ比と95%信頼区間をそれぞれ示している。

父親に対する回答と、母親に対する回答の規定要因は概ね同様の傾向を示している。特筆

すべきは、親の健康状態ときょうだい地位の影響である。

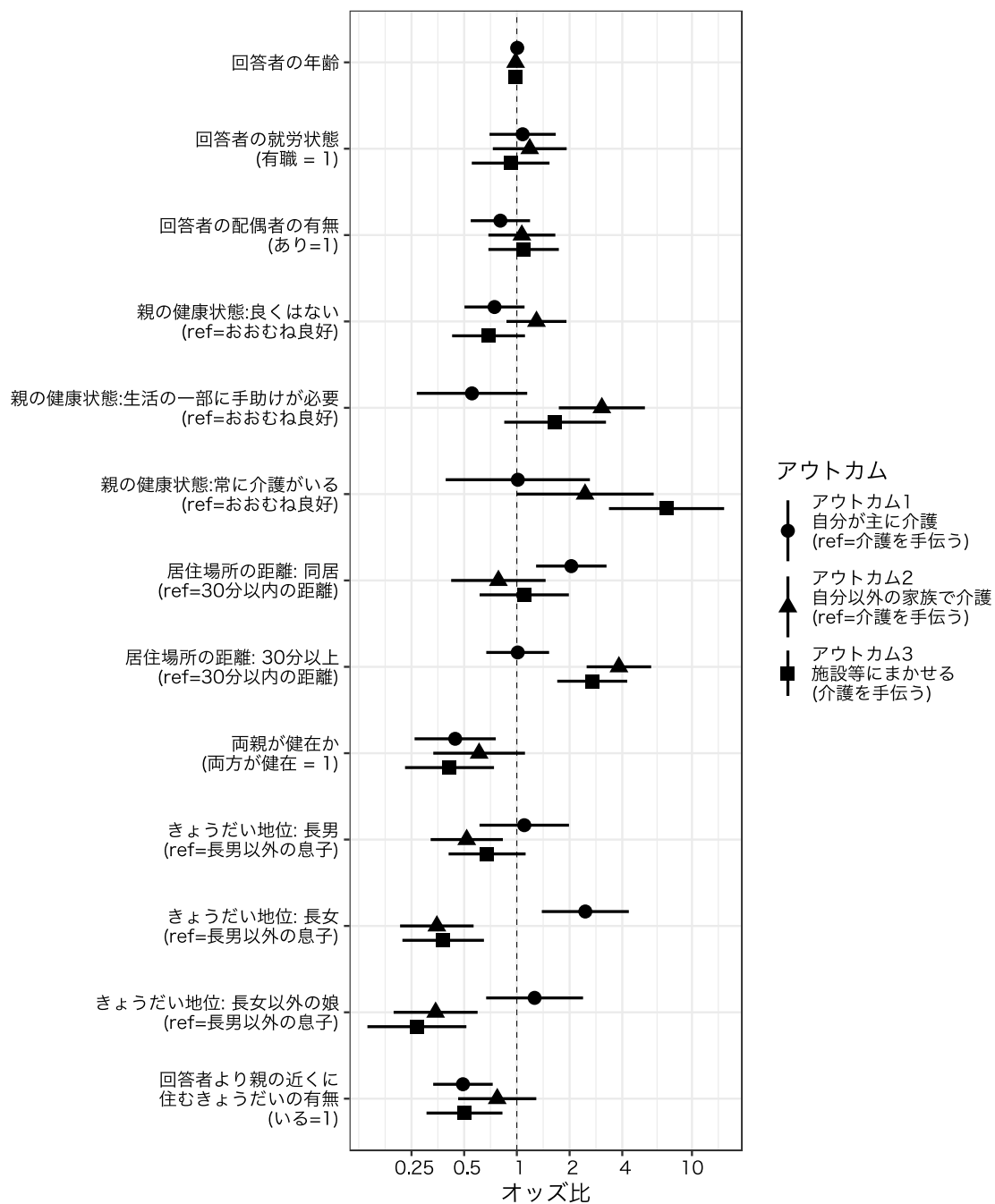


図1 父親に対する介護役割予測をアウトカムとした多項ロジスティック回帰分析の結果 (推定値と95%信頼区間)

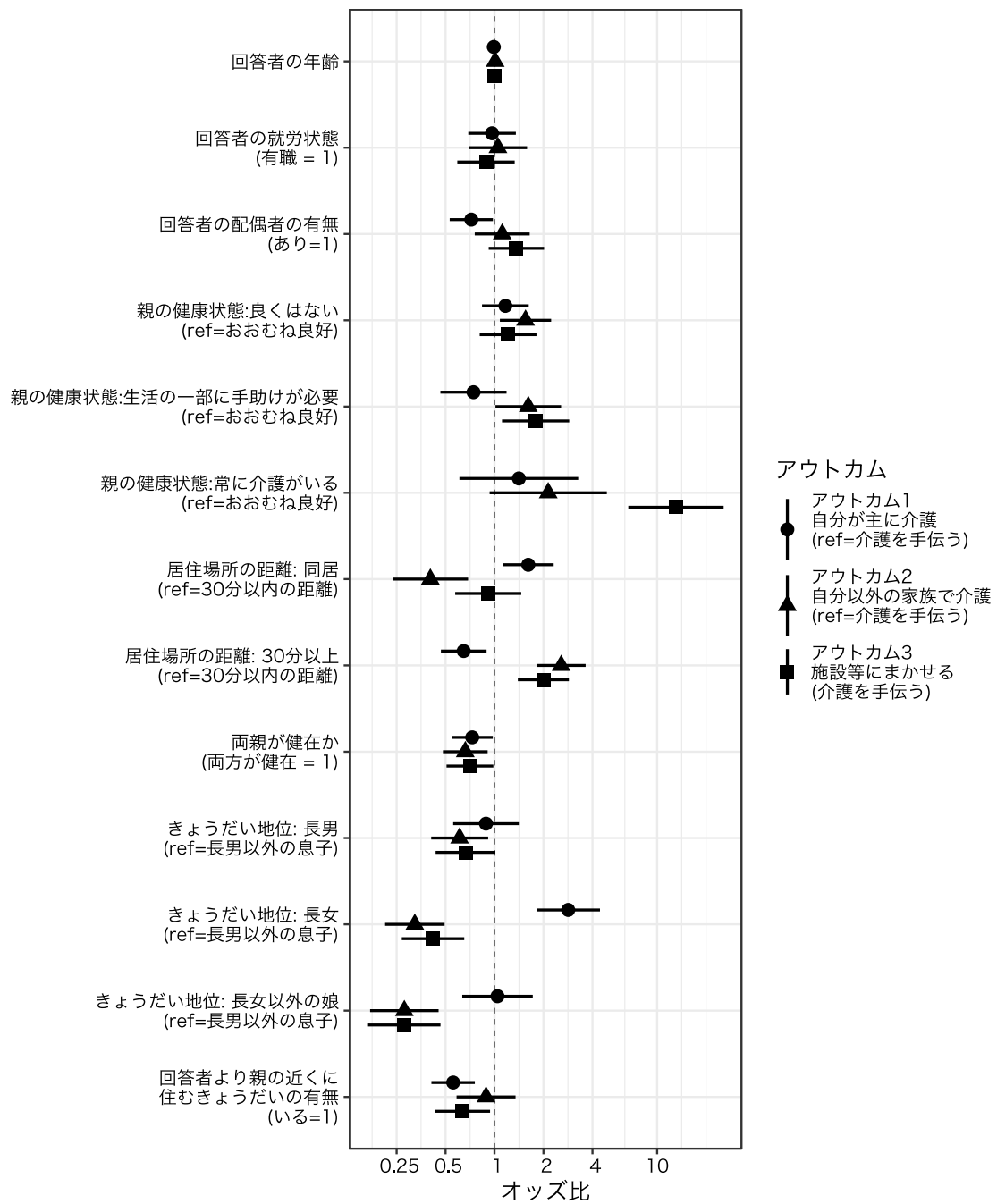


図2 母親に対する介護役割予測をアウトカムとした多項ロジスティック回帰分析の結果 (推定値と95%信頼区間)

まず、親の健康状態が悪化していくごとに、「自分以外の家族で介護する」「施設等にまかせる」という、回答者自身が介護に関わらない選択肢が選ばれやすくなっていく。「生活の一部に手助けが必要」という状態であれば「自分以外の家族で介護」、「常に介護がいる」という状態であれば「施設等にまかせる」という回答がそれぞれ有意な推定結果となった。

「長男以外の息子」を参照カテゴリとした場合、長男であれば、「自分以外の家族が主に介護する」という選択肢を選ぶ確率が有意に低い。しかし後で述べるように、長男がこの選択肢を選びにくいのではなく、長男以外の息子が、「自分以外の家族で介護する」という選択肢を選びやすいと捉える方がよい。

娘の場合、長男以外の息子をベースとしたとき、長女もそれ以外の娘も、「自分以外の家族で介護する」「施設等にまかせる」という選択肢の選びやすさが有意に低く、長女はさらに、「自分が主に介護する」という選択肢の選びやすさが有意に高い。

また、回答者よりも親の近くに住んでいるきょうだいがいる場合、「自分が主に介護すると思う」という選択肢と「施設等にまかせると思う」という選択肢を選ぶ確率が有意に下がっている。

4.2 仮想ケースから予測値を比較

多項ロジスティック回帰分析の推定結果は単独で全体像をイメージしづらいため、この節では、先ほどの推定結果をいくつかの仮想ケースに当てはめ、それぞれのアウトカムが選ばれる確率の予測値を示す。ひとまず標準誤差は考慮せず、推定値を特定の仮想ケースに当てはめ、それぞれの選択肢を選ぶ確率がどのように変化するかを計算した。

4.2.1 親の健康状態からの予測

図3は、下記の仮想ケースの下で各選択肢が選ばれる確率の予測値を示したものである。

図3で用いた仮想ケースの内容は以下の通りである。回答者は年齢が50歳、職に就いており、既婚、長男ではない息子を想定している。親の側は現在配偶者が健在ではなく、回答者とは30分以内の距離で別居しているという仮想ケースを用いる。この条件下で、親の健康状態によって回答の予測値がどのように変化するかを示したのが図3である。

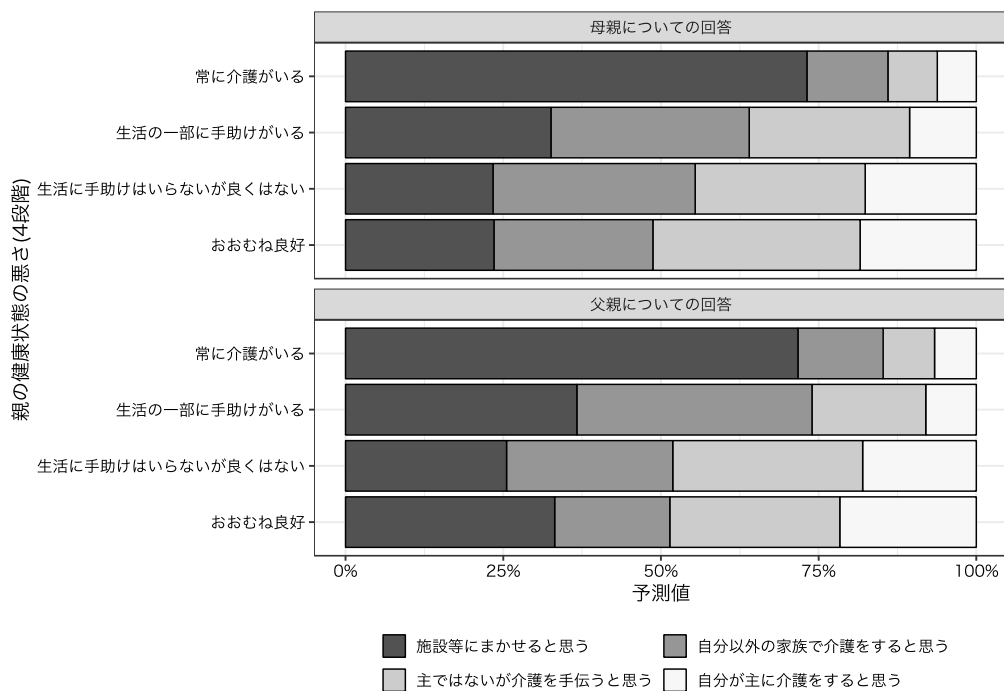


図3 仮想ケースに推定値を当てはめた場合の予測値(親の健康状態による比較)

父親に対する回答と母親に対する回答では、概ね近い傾向を示している。父母いずれの回答でも、親の健康状態が悪くなるほど、「自分が主に介護をと思う」という選択肢を選ぶ確率が一貫して下がっていく。そして、親の介護ニーズが顕在化していくにしたがって、「施設等にまかせると思う」という回答が増えていく。

こうした点からは、親が健康である時期は、将来的に自分でも介護に関わると想定してたととしても、実際に介護ニーズが顕在化していくにしたがって、他の人の手を借りることを検討し始めることが示唆された。

4.2.2 きょうだい構造からの予測

次に、きょうだい内の地位と、きょうだいの相対的な居住場所に着目し、推定されたモデルを仮想ケースに当てはめる。仮想ケースの内容は以下の通りである。回答者は年齢が 50 歳、職に就いており、既婚、親の健康状態は「生活に手助けはいらぬが良くはない」という程度で、親は現在配偶者が健在ではなく、回答者とは 30 分以内の距離で別居しているという仮想ケースを用いる。この仮想ケースに対して推定結果を適用し、きょうだい内の地位と相対的な居住場所ごとにアウトカムの予測値を示したのが図 4 である。こちらも母親に対する回答と父親に対する回答で顕著に差が見られるわけではないため、それらの差には言及しない。

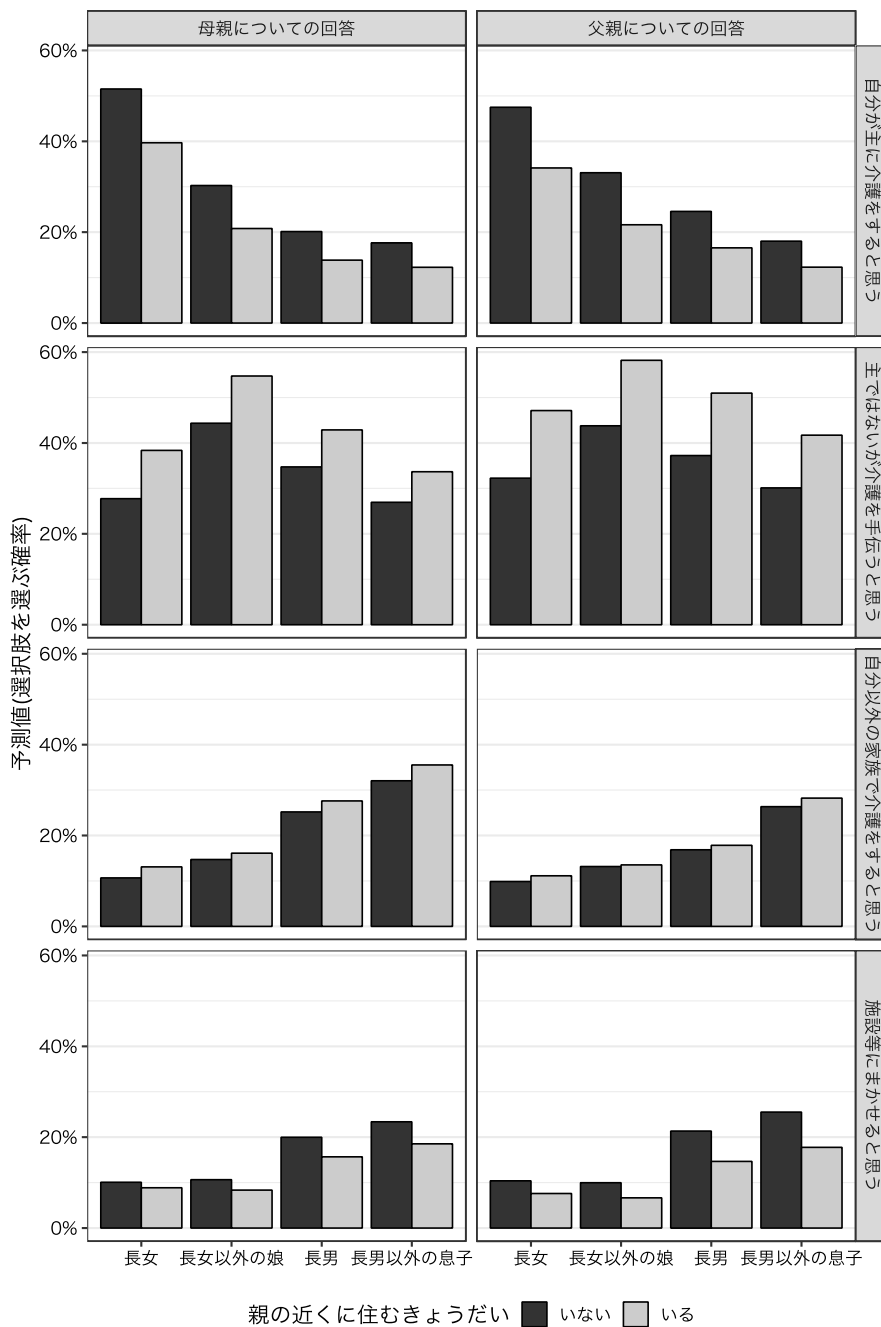


図4 仮想ケースに推定値を当てはめた場合の予測値(きょうだい構造による比較)

まず、きょうだい内の地位については、息子よりも娘の方が、親に対し「自分が主に介護すると思う」という回答を示しやすい。また、息子の方が「自分以外の家族で介護をすると思う」「施設等にまかせると思う」の選択肢を選びやすく、さらに長男よりも長男以外の息子が、そうした自分が介護に関わらない選択肢を選びやすい。

次に、回答者よりも親の近くに住んでいるきょうだいがいるか否かによる違いを確認す

る。親の近くに住むきょうだいがいる場合は、「自分が主に介護をすると思う」という選択肢を選ぶ確率は下がる。「自分以外の家族で介護をすると思う」という選択肢を選ぶ確率は若干上がるが、この点は図1および図2において有意ではなかった。そして、回答者よりも親の近くにきょうだいが住んでいる場合、「施設等にまかせると思う」という選択肢を選ぶ確率は下がり、「主ではないが介護を手伝うと思う」という選択肢を選ぶ確率は上がる。以上の点を見ると、回答者よりも親の近くに住むきょうだいがいる場合、施設に入所することはあまり想定せず、家族による介護を想定していることが分かる。他に頼れそうなきょうだいがいる場合、自分が主たる介護者となる想定はしにくくなるが、それでも他の家族が行う介護に補助的に関わるという想定をしやすいという結果となった。

5. 考察

本稿の分析結果からは、以下の点が指摘できる。

まず、親の健康状態が良好な時期は、子どもは親の介護にある程度関わることを想定しやすいが、親の健康状態が悪化し介護の必要性が顕在化するにしたがって、施設などでの介護を想定しやすいことが明らかになった。親がまだ健康で、介護をそれほど切実に捉えていない状況では家族介護でなんとかできるという楽観的な想定をしやすいが、いざ親の介護が現実味を帯びるにしたがって、自分が主に介護するという意向が退き、さらに施設などの外部サービスへの期待が高まっていく可能性が示唆された³。

この点から示唆されることはまず、親の介護をどのように担うかという意向や想定は、状況に応じて十分変わりうるという可能性である。出生順やきょうだい構成といった固定的な要素以外にも、親の介護ニーズのように比較的柔軟に変化する要素によっても、介護の意向や想定は十分変わりうる事が予想される。

また、自分や家族にとって介護が切実な問題ではない人々は、公的介護サービスの必要性を過小評価していることも示唆している。急な変化によって介護問題と向き合わざるをえなくなった家族に対しては、ゆっくり心の準備ができた人とは別の支援ニーズがあることも十分に考えられる。

本稿の分析では、きょうだい地位はいくつかの点で介護意向と関連していると同時に、きょうだいによるサポート資源のあり方も介護意向と関連していることも明らかになった。出生順やきょうだい地位という観点では、息子よりも娘の方が、親の介護に自分で関与する想定をしているほか、長男かそれ以外の息子か否かという点でも、想定の内容は少しずつ異なった。そして同時に、きょうだいの誰かが相対的に親の近くに住んでいる場合、それによって、親の介護として想定している内容に差が出ることも明らかになった。より親の近く

³ 本稿の分析では、親の介護ニーズによって子ども側の介護意向に差があることを示したが、この分析だけで、親の介護ニーズが高まることで子どもの意向が「変化する」ことが確かめられたわけではない。今回の分析は因果関係を厳密に扱うアプローチではないという点は、今回の分析の限界である。

(もしくは同じくらいの距離)にきょうだいの誰かが住んでいる場合、「自分が主に介護をす
ると思う」という回答が減少する一方で、「主ではないが介護を手伝うと思う」と答える確
率は高まることが明らかになった。さらに、「施設等にまかせると思う」という回答は減少
しており、「自分以外の家族で介護する」という回答には明確な差が見られなかった。した
がって、親の介護において頼ることができそうなきょうだいがいる場合、施設等ではなく家
族による介護を志向し、さらに、自分が介護に全く関与しなくなるという方向ではなく、自
分が補助的な役割に回りつつも家族介護者として参加するイメージを持ちやすくなること
が示された。親の介護のあり方やその意識を決めるメカニズムにおいて、きょうだい関係が
どのような役割を果たしているのか、今後も検討が求められる。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 JP17H01006、21K02029、20H05804 の助成を受けています。

【備考】

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

【文献】

- 濱島淑恵, 2018, 『家族介護者の生活保障 実態分析と政策的アプローチ』旬報社。
- 春日キスヨ, 2001, 『介護問題の社会学』岩波書店。
- , 2010, 『変わる家族と介護』講談社。
- 春日井典子, 2014, 『[新版] 介護ライフスタイルの社会学』世界思想社。
- 菊澤佐江子, 2007, 「女性の介護——ライフコース視点からの考察」『福祉社会学研究』4: 99-119.
- 菊澤佐江子・植村良太郎, 2019, 「中高年女性における介護と就業の相互の関係——二時点パネルデータ分析による検討」『老年社会科学』41(1): 9-17.
- 厚生労働省, 2020, 「2019 年 国民生活基礎調査の概況」(2021 年 5 月 20 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/14.pdf>).
- 小山泰代, 2001, 「世帯内外の老親介護における妻の役割と介護負担」『人口問題研究』57(2): 19-35.
- 内閣府, 2003, 「高齢者介護に関する世論調査」政府広報オンライン (2021 年 5 月 21 日取得, <https://survey.gov-online.go.jp/h15/h15-kourei/2-2.html>).
- 中西泰子, 2007, 「若者の老親扶養志向にみるジェンダー——「娘」の意識に着目して」『家族社会学研究』19(2): 45-57.
- , [2009] 2016, 『若者の介護意識——親子関係とジェンダー不均衡 (POD 版)』ミ

ネルヴァ書房.

- 西野勇人, 2021, 「高齢の親に対する子からの実践的援助パターン——親子関係、援助内容、公的サービス利用に着目したマルチレベル分析」『福祉社会学研究』18: 175-93.
- 白波瀬佐和子, 2005, 『少子高齢社会のみえない格差——ジェンダー・世代・階層のゆくえ』東京大学出版会.
- 染谷淑子, 2003, 「社会変動と日本の家族——老親扶養の社会化と親子関係」『家族社会学研究』14(2): 105-14.
- 杉山佳菜子, 2010, 「成人子とその親子関係——子世代からみた老親扶養意識を中心に」『老年社会科学』31(4): 458-69.
- 田中慶子, 2013, 「きょうだい地位と実親の介護」『家計経済研究』98: 25-34.
- 津止正敏, 2021, 『男が介護する——家族のケアの実態と支援の取り組み』中央公論新社.
- 堤修三, 2010, 『介護保険の意味論——制度の本質から介護保険のこれからを考える』中央法規出版.
- 大和礼子, 2016, 「介護保険導入に伴う介護期待の変化——自分の介護を誰に頼るか」稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009——全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学』東京大学出版会, 275-91.
- , 2017, 『オトナ親子の同居・近居・援助——夫婦の個人化と性別分業の間』学文社.

How Adult Children Assume Their Role When Their Parents

Need a Care?

: Focusing on Kinships and Sibling Structures

Hayato NISHINO

Higashi-Nippon International University

The purpose of this study is to examine how adult children assume their role when their parents need long-term care. This study estimated multinomial logistic regression models, which predict how children assume a caregiving style for their parents, using the data of NFRJ18. The predictors consist of respondents' information, parents' situation, kinships, and sibling structures. This study observed the following points. First, when a parent has any dependency, their children are more likely to assume that they will not participate in caregiving. Second, kinships are related to an assumption about filial responsibilities. Third, when any siblings live near the parents rather than respondents, respondents are more likely to assume that they do not participate as the primary caregiver, and simultaneously, they will not tend to use a nursing home.

Key words and phrases: intergenerational relations, long-term care, filial responsibility, siblings structures